

# 島尾敏雄『マホを辿って』へ至る過程

—「深ぶかとした暗黒の未知の時の姿」を巡って—

小林 治

1

戦前から戦後に架けて辛抱強く紡がれ続けた島尾敏雄の作品世界は、昭和六十一年十一月、その思いがけない死によって幕を閉じた。それはまるで連作長編『魚雷艇学生』<sup>①</sup>の刊行を待つかの如くであったと言ってよい。その『魚雷艇学生』として纏められた一連の作品の嚆矢である『湾内の入江で』<sup>②</sup>『魚雷艇学生』第四章相当を發表する直前に書いた作品に『マホを辿って』<sup>③</sup>がある。没年から遡ること約五年前の發表だ。その發表順と發表時期から考えて、結果的には創作活動の総仕上げが始まるうとしていた時期に書いた作品といえよう。そして、その最終部に現れるマホという島尾にとってただ一人の孫の録音された声についての次の言葉は、あらゆる島尾作品の本質を捉えていて妙であり、島尾がどんなものであれ作品の素材として選んだものを通じて、すなわち言い換えれば「素材の」を辿って「いったい何を見ようとしているのかを考える時、鍵となる作品であるように思われる。

その底には深ぶかとした暗黒の未知の時の姿が横たわっていて、ごく目先のあたりでその奔湍が飛沫をあげて流れ行く有様が、私には目に見えるようであった。するとマホはそのことを私に明らかに覚らせるための機縁だったかも知れないと思えてきた。

『マホを辿って』はその表題のとおり、島尾にとって現実の長男（伸三）の最初の子供、すなわち初めての孫であるマホ（真帆）を素材として書いた作品である。赤ん坊の頃から始まって、今ようやく三歳になろうとしているマホの声を常々カセットテープに録音してそれに聞き入ることを繰り返している、当時、茅ヶ崎に住んでいた島尾とその妻（ミホ）がそこにいる。マホは時々、息子夫婦とともに遊びにきていたが、今度初めて東京から泊まりにくることになる。ただし、マホにとっては叔母にあたる島尾の長女（マヤ）・マヤ、すなわちことばを喪つてものをしゃべることがなくなってしまうマヤがそこにいることが絶対の条件としてつけられ、必要不可欠の存在であることが明らかにされていく。いわば、ことばを獲得し始めたばかりの者と、ことばを既に喪つた者との邂逅が語られているのである。

マヤについては、読者は連作長編『死の棘』<sup>3</sup>に関連する作品の中でも実名そのままに（長男の場合は『死の棘』では伸一になっている）しばしば目にしてきたわけであるが、作品内ではマホとの関わり中で次のように記されている。

実はマヤは物が言えないし、身体の動作も甚だぎこちない。軽い麻痺もあって、一見してそれとわかった。もう二十年も前のことになるが、小学校の三、四年のころまでは、活発でおしゃまな、むしろおしゃべりな娘であった。それが次第に言語に障害を生じはじめ発音がおかしくなつて遂にしゃべらなくなつてしまったのだ。いくつもの大学の付属病院などを、三、四年にわたつて廻り歩き、診察を受けさまざまな検査をして

もらったが、結局は障害の原因がわからずに終わった。マホが生まれたとき、私たちの抱いた大きな危惧は、物心がつくようになった彼女が、マホを見てどんな反応を示すだろうかということであった。それは家の外に出たときにマホに向けられた人々の好奇の目を考えるからであった。——中略——ところがその危惧は全く無かったと言っている。マホは生まれた当初から、マホには特別になつく態度を示したからだ。——中略——もつともマホの方も誠にマホ思いだと言わなければならない。彼女の小遣いの大きな部分はマホのために使われた。——中略——しかし適当な節度をわきまえ、マホのためによくないと思えば、はっきりと拒否して決して譲らないところもあるのだ。二人のあいだには特別な疎通方法でもあるのだろうか。——中略——いずれにしろマホとマホのこのように仲の良い状態は私にも妻にもこの上ない安堵であることにちがいはなかった。たとえときたまふといつまでもつづいてほしいと祈るような思いはしのびこむにしても。

島尾と妻とマヤとマホという三世代にわたって交わされ続けるそれぞれへの濃密な親愛の思いがそこにはある。翻つてこの三世代にわたるかわりについて詳細に述べるならば、やはり『死の棘』において詳述されているトシオのミホへの裏切りから始まる愛憎と葛藤と贖罪の意識が絶え間なく二人を責め苛む日々の繰り返しの中で、放置され心に深い傷を追っているはずの二人の幼子がけなげに生きる姿についてまで遡って見ておかなければならないだろう。

## 2

むろん島尾が戦後を生きる原点には、奄美群島加計呂麻島呑之浦に第十八震洋隊（隊員一八三名）の隊長として駐屯し、震洋艇による特攻攻撃をすべく約十ヶ月間待機し、遂に昭和二十年八月十三日、出撃が下命され準備

完了するも、即時待機のまま十五日の敗戦を迎え、特攻出撃することなく、そのまま戦後の日常へと帰還していくという死から生への反転がある。この死から生への反転という戦後の出発点の措定については以前、拙稿<sup>5</sup>で次のように触れたことがあり、再掲しておきたい。

すなわち、既定されていた特攻による死から「死の方に進まなくてもいい生きのびられる世界」へ突然、帰還することが決まっても、そこに「手ばなしで享受できると考えた生の充実」はなく、そこにあるのは「言いようのない寂寥」である。「私」にとつて「生きのこること」がそのまま特攻以前の生の場所への帰還とは決してならないのだ。むしろ、死へ向けての「戦争と軍隊に適應することを努めその中で一つの役割を占めたことによつて出来かけていた筋道」の突然の消失は、それが死へ向けて連なっていた揺るぐことのない方向性であっただけに、これからの生へ向けて逆方向への出発をがんじがらめに絡め取つてしまい、「私」を立ち尽くさせるのである。そのことは、今まさに開始された戦後という時系列のあらゆる生の場面に於いて、「生きのびるためにそのとき適宜にえらぶ考えは、環境の大きな曲り目の度毎にまたえらび直さなければならなくなり、とどまるところなくり返される」という方向性を持たないゆえの不安定に繰り返される魂の彷徨の予感を、宿命的に引き寄せてしまつていると言えよう。そして、戦後において実際にその彷徨が繰り返され、作品に刻みつけられていくことになる。実生活では、昭和二十年九月、佐世保にて解員され、戦災を免れていた神戸の父の家に身を寄せ、翌昭和二十一年三月、加計呂麻島で出会った大平ミホさんと呼び寄せて結婚している。

つまり言い換えれば、島尾にとつて、戦争体験に関わる全ての作品は、特攻による死はむろんのこと、かといってそこから反転して生へと突き進むこともできず立ち尽くさざるを得ない、したがって方向性を持たないゆえの不安定に繰り返される魂の彷徨の繰り返しの中でしか戦後を生き得ないという痛切な思いが仮託され造型されて

いるのである。この戦後の日々が、時には退廃さえ招きかねない魂の彷徨の繰り返しとしてしか存在しないという思いは、例えば『湾内の入江で』発表直前に書かれた以下の文章においても、過ぎ去った青春の日々を回想する形となりつつもやはり確認することができる。

終戦直後の頃の私は特攻隊のことを思い出さずえいやであった。非戦闘員の原爆や空襲、沖縄戦の体験とくらべてもまるで無疵の体験ではないか。そのことはむしろ伏せておきたい気がしていた。しかし次第に私にとつてその体験が決してそれ程軽くはないことに気づきだした。歳月が経つと共に、それが何であつたかを見究めたい思いがつのようになった。自分の青春が遠ざかり行くせいか、その回想には奇妙な思い入れのまざるのが防げなくなつた。或いは歳月と共に過去が風化して来たのだったろうか。そしてそれらの日が青春と背中合わせになつていたことは、私の目をしめつぼくしてしまうのかも知れなかつた。

今にして思うと震洋隊は不思議な部隊であつた。たとえそこに自分の青春が重なり、又多くの教訓が得られたにしても、特攻隊なる発想の根のところにはうづくまつている異様なものの気配を私は怖れないわけにはいかない。うまく言えないが、それは何やら退廃に押しやられるようなものだ。そしてそれを計る人がどんな顔つきでのめつて行くのかと考えるだけでも、言いようのない無気味な思いに落ちこんで行きそうだ。

『震洋の横穴』毎日新聞夕刊、昭和55・8・15

そして、実際に不安定に繰り返される魂の彷徨と退廃の結果として最大の出来事が、昭和二十九年の夏の終りの頃から始まる妻ミホの心性反応の発病とその治癒のための格闘の日々という形で始まっていくのである。さて、ここで先程述べておいたが、島尾とマヤとマホという三世代にわたるかかわりについて詳しく見るべく、最初にしばらく連作長編『死の棘』の中に描かれたマヤの姿をいくつか追ってみよう。

正月がやってくるが、どうしたらいいか。四つのマヤは、いつもおびえ、父親の顔をじつと見つめたり、また小刀をいじって指先に切り傷をこしらえても、ちり紙をぐるぐる巻きにして、血のにじんだものはベッドの下やたんすのうしろに投げこみ親たちに隠して、そのことを訴えようともしない。

(第四章「日は日に」)

廊下の縁先のところに、マヤが近所の子どもを三、四人連れてきて、

「フラネ、フラネ、アタチノオトウシヤン、キチガイデシヨ」

と言っている。にこにこ笑って、まるで威張っているように見えた。

「子どもは見るんじゃない！」

と妻がどなったら、子どもらはびっくりして逃げて行った。

(第四章「日は日に」)

マヤは口のはしにおとなびた笑いを浮かべて母親の泣き叫んでいる顔をながめ、フラネ、フラネ、ウチノカーシヤン、キチガイデシヨとはやしたて吹聴するときの顔つきになっている。ふたりの看護婦がやつとあばれる妻をつかまえてくれた。何もかもいっぺんにめらめら火がついて燃えだしたようで收拾がつかない。

(第七章「日のちぢまり」)

するとマヤは泣きべそをかいて私のそばに逃げてくる。

「泣かなくていい、泣かなくていい。もうお兄ちゃんところなんかに行かないで、ここにいなさい」

しばらくは私のそばでじつとしていても、すぐまた立って兄のほうに行く。はかせたスラックスのそとに

下着のはしなどはみ出させ、廊下にでもころがったか、砂ぼこりを一面になすりつけ、鼻の下はよごれほうだい、赤ちゃけてやわらかな髪の毛は櫛目も通さぬままもつれかたまりこぶになっているが、かまってやる気力が出ない。

(第七章「日のちちまり」)

これらの引用部分だけでなく、『死の棘』で描かれる伸一とマヤの姿のどこを取ってもいいのだが、子供たちは父と母のうち続く格闘の日々の中で放置され、深く傷つき、おびえ、すさんでいる。このことは、伸一とマヤは父・島尾が自身の魂の彷徨と退廃に正面から向き合うために選んだ妻・ミホを治癒するための行為の結果を、もろにひつかぶって幼い日々を生きざるを得なかったということだろう。悲しいが、子供たちはそれを拒否できない。けなげに重い足枷を黙って引き受けている。だがそれは、この親子の一見すれば逆説的ではあるが、揺るぎない紐帯ともなっている。島尾から伸一とマヤという次なる世代へ、苦しい日々の中において精神の深いところまでまるで澱のようにして沈んだものとして家族と繋がって生きることの意味が伝えられているということだろう。しかし、それは時の経過と共に大きな犠牲をマヤに強いこととなる。先に引用した『マホを辿って』でも述べられていたように、東京を離れて家族揃って奄美大島の名瀬市へ移り住んだ後に、脚の麻痺と言語障害がマヤを襲い始めるのである。そのことについて述べたいくつかの島尾の文章を年代順に挙げておく。

マヤのために神経科に行った。今までに何回もくりかえした、あとさきのいきさつをそこでまた私はかたくなって申し立てた。かんじんのことを言い落しそうなおそれと、同じことを反復する疲れがにじみ出てしまう。——中略——精神や肉体の機能はひとたび故障をおこしてしまえば、その部分のひずみはもとにもどらないのではないかという疑いがなくせない。幾人かの医師の診察によってマヤの言語障害の原因がつかみ出せなかったことが、いつそうその疑いを黒くぞってしまふ。『マヤと一緒に』「新潮」昭和37年2月

病状の進んだマヤを東京の病院につれて行ったのは、障害の原因を徹底的につきとめてもらうためだった。それには長期の入院が必要と言われ、妻は付添って東京に居残った。留守の名瀬で私と伸一のふたりだけの生活がはじまると、ミユカが頻繁に遊びに来るようになった。——中略——やがて妻とマヤが帰って来た。病気の原因は結局わからずじまいだった。ミユカは遊びに来なくなった。

『幼女』「週刊朝日」昭和48年3月23日号

鹿児島や東京などの病院で診察を受けているが、ついに脚の麻痺と言語障碍の原因はわからないままだった。けれども、ここではあえて名瀬に移り住む以前の東京での苛酷な日々が、時を置いてその麻痺や障碍をもたらしたのではないかと考えてみる。苛酷な日々の中、知らず知らず精神の深いところで家族と繋がって生きることの意味を受け取っていたマヤは、しかし、それが肉体と精神へのあまりの重さとなっていることに耐えきれず、発症したのではないかと。心の奥深くにその重さを受けとめているがゆえの悲劇であろう。その後ずっと平成十四年にマヤが亡くなるまで抱え続けて生きることになる言語障碍は、「遂にしゃべらなくなってしま」うという段階にまで達してしまう。しゃべらないこと——沈黙の世界の中でその後のマヤは生きていったのである。

### 3

ここで、もう一度『マホを辿って』へと戻るのだが、言葉を喪って約二十年後にマヤにとって姪であるマホが誕生する。新しい家族の誕生である。マホは成長し、やがてマヤの存在を受けとめていく。『マホを辿って』に次のような記述がある。



二、三箇月に一度ぐらゐの間合いを置いて息子夫婦はマホをつれて遊びに来ていたが、そのうちにひとりでも泊まれるように馴らして行こうということになった。

最初の試みは七月のはじめに実行された。まず妻が電話に出たマホに彼女の言葉遣いを真似て、誘ってみた。「マンマーとこゝろにお泊まりする？」

マンマーとはマホが自分のおばあさんを指した呼びかけである。祖母の意味も含むアンマという南の島の言葉をマホがなまめたものだ。すると、

「アプチャン、オトマリシナイ」

という即座のはっきりした拒否の言葉が返ってきた。最初自分の名前をアホとしか言い表せなかつたマホが、やがてマフになりアプに変わって今のところアプちゃんに落ち着いている。

妻はあきらめきれずに動物園につれて行くことなどをえさにしてなおも誘つてみたが、オトマリシナイこととはつきりした返事をくりかえしていた。それがふと気が変わったかのように、「マヤサンモイル？」とたしかめ、居ることがわかると（彼女の叔母になるマヤはいつだつて私たちと一緒にいるのだが）、「アプチャン、マヤサント、オトマリスル」とあつさり承諾の返事に変えたのだつた。それからあとのマホの行動は甚だいさぎよいものであつたと言うほかはない。——中略——しよちゆうマヤにまとわりついていた。夜は四人でとこをならべて寝たが、結局マホはマヤの所にすり寄つて行つて眠つた。マヤが好きで好きで仕方がないようなのだ。ただの好きを通り越してそれには何やら宿縁のようなものをさえ感じさせられた。無条件に慕い寄るふうなのだ。私たちにはその状態が何よりの喜びではあつたが、なぜそうであるのかはわからなかつた。

マホのマヤに対する思いは、マヤという物言わぬ存在に「無条件に慕い寄」つて「まとわりつ」き、「なぜそ

うであるのかはわからない、他の家族の者に「宿縁のようなものをさえ感じさせられ」るほどの強い絆を感じて惹きつけられているがゆえのものだろう。マホが生まれる以前の時間の中でマヤが獲得したとも内側に抱え込んだとも言える魂の姿形を、幼いマホはそれゆえの純粋さで瞬時に見抜き感じ取って、「無条件に慕い寄」るのである。そして、島尾はそのことに、マホが誕生し、マヤと出会い、同じ時間を共に生きることができた魂の同伴者としての「好きを通り越し」た「宿縁」を見ていると言う構図がそこにはある。まさに、親から子へ、さらに孫へと三世代にわたる魂の引き継ぎの様子を凝視しているのである。

しかし、ここで注意深く立ち止まって考えねばならぬのは、その引き継がれようとしている魂の姿形がいったい如何なるものであるかということだ。先程、私はあえて、「マホが生まれる以前の時間の中でマヤが獲得したとも内側に抱え込んだとも言える魂の姿形」と書いたが、それは正と負の両面性という意味である。正を言うならばそれは字義どおりの家族の強い絆の獲得である。それがこの場合の魂の姿形のひとつであることは間違いない。だが、同時に内側に抱え込まれた負の部分としての魂の姿形も引き継がれていることを島尾は見逃さない。本稿の1ですでに触れていたことだが、『マホを辿って』では、島尾がマホの声を日常的にカセットレコーダーに録音してそれに聞き入ることを繰り返していることが書かれている。

ただ声だけが機械の中にそのまま残っているのだ。私は切ない気持ちに陥り、この過去を呼び戻すレコーダーの仕組みは一体何だろうと感傷的な気分にもなった。時はほとんどん流れ去って一刻もとどまることはないのだ。帽子をはずそうとしてはずれぬままアリガトウゴザイマシタと深ぶかとお辞儀をしていたつい先程のマホの姿も、もう私の記憶の中にしかとどまってははいない。そしてマホの印象もひとりでに、どんなん女に育っていくのだ。しかし唐突のように少しずつ私に力が湧いてきた気がしたのはなぜだろう。いや実のところは果たして力が湧いてきたのか、或いは時の虚空に吞まれていくのかわからぬあやしげな気分ではあった

が、私は次々にテープをかけ、過去だか現在だか見境のつかぬ、かきまぜられた時の中にはいつていたようだ。——中略——これらの大方は今年にはいつてからの収録のものが多いから、そのまま今のマホにも重ね聞くことができたが、その底には深ぶかとした暗黒の未知の時の姿が横たわっていて、ごく目先のあたりでその奔湍が飛沫をあげて流れ行く有様が、私には目に見えるようであった。するとマホはそのことを私に明らかに覚らせるための機縁だったかも知れないと思えてきた。

島尾を癒す録音されたマホの声はやがて、「時はどんどん流れ去って一刻もとどまることはない」、「記憶の中にしかとどまってははいない」、「マホの印象もひとりで、どんどん女に育っていく」ことを厳しく突きつけてくる声として聞こえ始め、すでに自分が「過去だか現在だか見境のつかぬ、かきまぜられた時の中にはいつて」しまっていることを気づかせている。このことは実は島尾が、自分たちを癒してくれるレコーダーの中のマホも、とどまることのない宿命としての時の流れの中では必ず過去となるしかなく、いずれ「時の虚空に吞まれていく」のだという島尾独特の時間意識へと導かれていることを物語っている。無垢な幼女であるマホがいずれ「どんどん女に育っていく」のを押しとどめることができなさと感じることは、遙か二十年近く前にマヤがことばを喪っていくことをとどめることができなかつたのと同じことがまた繰り返されているのだとして島尾には意識されるのである。時の流れの中で繰り返され続ける喪失の物語がそこにある。

であるならば、それはまさに、先程触れたところの、島尾にとつては二人の家族の内側に抱え込まれた負の部分としての魂の姿形をそのようなものとして凝視しているがゆえの表現であると読むことが可能なのだ。ゆえに、この「マホを辿って」、紡がれた話もその最後に至って、あらゆる現象の底に「深ぶかとした暗黒の未知の時の姿が横たわっていて」、それは「ごく目先のあたりでその奔湍が飛沫をあげて流れ行く有様」として目に見えたと書いていることが、突飛ではなく十全な表現として了解されるのである。マヤもマホも「そのことを私に明ら

かに寛らせるための機縁だったかも知れないと思えて」来る道筋はそこに明らかとなっている。

そして、そこに書きつけられていることは、島尾にとつて特攻死に向かつて突き進んでいた時間が急に止まって反転していったことを凝視し書き続けることとも、また、その島で出逢いやがて妻となった少女が、自分の裏切りのために心を病んで狂気に陥り、反転して激しく糾弾することを凝視し書き続けることとも、全く同じ意識による作家的営為の足跡でもあるのだ。

マホを辿って、マヤを辿って、ミホを辿って、震洋を辿って、夢を辿って、島尾は作品の素材として選んだものを通じて、いったい何を見ようとしているのか。それは、たとえそれがどんな素材であろうと、時の流れの中で繰り返され続ける喪失の物語から逃れられない自身の宿命の影だろう。全ての素材が、自分が「深ぶかとした暗黒の未知の時の姿」の前に立ち竦んでいることを「明らかに寛らせるための機縁」であることを知る島尾がそこにいる。

(二〇二・九・二十四)

#### 注

- (1) 新潮社から刊行(昭和60年8月、全七章)。同年十二月、同作品集にて第三十八回野間文芸賞を受賞。
- (2) 「新潮」(昭和57年3月号)。同年六月、同作品にて第十回川端康成文学賞を受賞。
- (3) 「海」(昭和56年10月号)
- (4) 第一章「離脱」(「群像」昭和35年4月)〜第十二章「入院まで」(「新潮」昭和51年10月)の十六年間にわたって書き継がれた。
- (5) 『島尾敏雄の身体感覚―昭和二十年代の軌跡―』(『駒澤短大國文』第三十七号、平成十九年三月発行)

テキスト 『島尾敏雄全集』(全17巻 昭和55年〜昭和58年 晶文社)

(なお、全集未収録の作品は、初出に拠った。)